



おてん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

――。

【Nコード】

N8897A

【作者名】

おてん

【あらすじ】

「――私を殺す？それとも世界を殺す？」それが彼女が俺に言った最初の言葉だった。猶予は半年間。それまでに彼女が世界、どちらかを選択しなければならなかった主人公。彼女の言葉は本当なのか？それを疑問に思いながら主人公は猶予の半年間を過ごすのだった…。

人生というのは後悔の連続だと思う。

生きてく事で何かを選択しなければならなし、それを選択したらそれが成功、失敗に関わらず必ず後悔する事があると思う。

あの時あすれば良かった、こうしとけば良かった、とかだ。

俺はそういう人生だった。

でもそれは仕方ない事だと思ってきたし、それで我慢もしてきた。
いや……我慢しようと思いついてやってきた。

でも今回の選択は……我慢出来るんだろうか？

目の前の少女が口を開く。

言葉を発する為に。

「——それで、どうする？私を殺す？それとも世界を殺す？」

出会い、唐突、夜回り。

空が眩しい位の青色をしている。

まるでキャンパスに青のペンキをぶちまけたみたいだ。

俺だったら白にするのに。

何もかも白ければ、特に悩みもなく生きていけると思う。

俺は今学校へ登校してる途中だ。

山を切り崩した場所に我が高校があるのだからいかにせん坂が長い。
その分周りの景色はなかなかのものなのでいつもボーっと周りを見ながら歩いていたのだが、流石に一年以上も見てると飽々する。

それで空について考えてたわけだ。

などと思っていたらいつの間にか校門前だ。
どうやら空について考えるのはいい暇つぶしらしい。
明日から暫くこれでいこう。

そして俺は校門から50m位ある昇降口を目指す。

あと10mと差し掛かったところで斜め後ろから
「よー。おはようさん」
と声が来た。

「……宏か。おはよう。」

「やっぱりお前朝は反応薄いねー。こう、おはよう我が最愛で最高の友人よ、とか形容詞を色々つけてくんないかね？」

「基本夜型なんだよ……お前は朝からテンション高いな。」

「そうか？普通だと思うぞ。というよりいつもテンションが一定なんだと思うぞ。」

「まあ……そう言われると納得出来るかもな。」

こいつは高橋宏。

学校で男女関係なく人気があり容姿端麗と来て運動神経は抜群で学業も優秀と漫画から飛び出してきたみたいなやつだ。

中学からの付き合いなんだが何故か俺がお気に入りらしくいつも一緒に居る。

おまけにクラスもずっと一緒だ。

俺としては一緒に居て楽しいので文句はないのだがもっと俺以外にも友人を増やすべきだと思うんだが必要以上に他人に関わるとしなから不思議だ。

まあ俺も友人は少ないからあまり人の事は言えないが。

こうしていつもと変わらない他愛ない話をしながら教室に向かう。

「そーいやお前、夜回り先生って知ってるか？」

「あー…確か東京の方に居る説教先生だっけ？」

「そうそう。でさ、そのこっち版が居るらしいんだよ。」

「………パクりってやつか？」

「ただのパクりなら良いんだけどな。」「…つまり何か問題があると？」

「どうやら説教を通り越して暴力に走ってるらしいぞ」

「…なんというか、説教も度を超すと暴力に発展するのか？」

「さあねー…俺も人から聞いた話だから良く知らないしな。」

と、話が終わった瞬間にチャイムが鳴りお互いの席についた。

HRが始まり、その中で夜中に暴力事件が発生しているので注意しろとの話が出た。

宏の話に信憑性が出てきたがいまいちピンと来ない。

あまり考えても面白そうにない話題なので頭の隅にしまう事にした。

そして授業をなんとかやり過ぎて昼休みが来た。

普段は宏と二人で食べるのだがあいにく宏は先生の用事に付き合わされて今は居ない。

……たまに屋上で一人で食べるのも悪くないだろう。

そして俺は弁当を持ち屋上に向かった。

実はいうと、うちの学校は屋上は危険という事で出入り禁止だ。

だが管理はずさんなもので、ただ立ち入り禁止の張り紙が貼ってあるだけだ。

屋上はこの学校に入学した当初からのお気に入り場所になっていた。

とにかく眺めだけは最高なので一人になりたい時やボーっとしたい時はここに来ている。

それに出入りしてるのはどうやら俺だけらしく、街を一望出来る場所を独占してるのはいいい気分だ。

そしていつもの様に無駄な張り紙のドアを開いた。

真っ青な空が俺を迎えた。

そよ風が気持ち良く吹いている。

今日は屋上の質が高い日らしい。

「さてと…っ」と

俺はそこらへんに座り弁当を広げた。

風呂敷から弁当箱と箸を取り出し弁当箱のふたを開ける。

それでは…頂きます。

無論心の中での挨拶だが。

「ねえ………一つ聞いていいかな？」

「Σ！？………」

俺が卵焼きに箸を出そうとした時声が俺を襲った。
急いで後ろを振り返る。

そこには、一人の少女が立って居た。

そしてその少女は唐突にある言葉をつきつけた。
本当に唐突に。

「私を殺す？それとも世界を殺す？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8897a/>

2010年10月30日09時18分発行